

土から 死生を考える

第3回

食物連鎖から人間の死を考える

京都造形芸術大学 教授 原田 憲一



先に、自然界の掟は「共存共栄」だと書いた。だが、現実には、田んぼではカエルが虫を狙ったり、カエルがヘビに襲われたりしている。しかし、この「食う・食われる」の関係は、決して弱肉強食の表れではない。「食物連鎖」という、共存共栄を支える仕組みなのである。

生命の誕生は38億年前までさかのぼるが、原始の海では長らく単細胞生物の時代が続いた。ようやく6億年前のエディアカラ紀という時代になって、初めて体長が10センチを越える大型生物が熱帯の浅い海に出現した。現在のウミエラやクラゲに似た、体全体が軟らかい膜で包まれた平べったい生き物である。約100種類の化石が発見されているが、どれも、大きな口や硬い歯をもたず、海底に付着したり海中に漂ったりして、海水中の有機物をろ過して、えさにしていた。

5億4300万年前のカンブリア紀に入ると、生き物は一挙に1万種以上にも増え、海底を活発にはい回ったり水中を泳いだりする動物が登場した。しかも、化石を見れば、カニの甲羅のような硬い殻を持つだけでなく、鋭いトゲを生やしたり、目を5つも持っていたりと、明らかに防御の工夫が認められる。また、三葉虫の化石のなかには、するどい歯型がついたものもある。体長が50センチ以上もあった、当時最強の捕食者アノマロカリスがかみついた跡である。これらの化石は、この時代に食物連鎖が確立したことを証拠づけている。

カンブリア紀以降、生き物たちは、海底では堆積物の表面から内部まで、水中では海底付近から海面まで、生息域を分化した。そして、知覚機能と運動機能を高めて、お互いをえさとすることで、一定の地域内で生息できる生き物の数と種類を増やした。たとえて言えば、人口増加にともなう都市の高層化と分業の発達のようなものである。東京を例にすれば、江戸時代には平屋と土農工商だけで間に合ったが、人口が十倍増した今では、林立する高層ビルによって居住空間を確保し、次々と生み出される「すき間産業」が人々に職を提供している。

食物連鎖は今日まで途切れることなく続いてきた。小はアメーバから大は恐竜まで、さまざまな生き物が、「共存共栄」という自然界の掟に従って、他の生き物のえさになってきたからである。しかし、今や人間は、仲間の遺体が餌食になるのを防ぐために、火葬や土葬に付している。つまり、意図的に食物連鎖から離脱しているのである。こうした人間の死に、果たして意味はあるのか。この問いに対して、人間の死は「将来世代」のためにある、と答えることができるであろう。

たとえば、ミイラ化した小ザルを手放さない母ザルのように、野生動物の母親が幼子の死を悼んだり、逆に幼子が母親の不慮の死を悲しんだりする姿が観察されている。だが、死の悲しみが仲間や次世代に伝わることはない。ところが、人間の死は、最期をみとらなかった人々にさえも大きな影響を与え、しかも世代を超えて語り継がれる。その証拠に、私たちは近親者の死だけでなく、ソクラテスや織田信長の死をも知っている。さらに、彼らの死（および死に至るまでの生）から多くの教訓を得て、生きる姿勢を正している。たとえば、文天祥や西郷隆盛が死を賭して大義を貫いたのは、後世の評価を信じたからである。また、名もなき農民や商人たちが家訓を遺したのも、後世の安寧を案じたからである。

今や日本では、ほぼ全員が病院で生まれて病院で死を迎えている。私たちが死から目を背け、日常生活から死を遠ざけてきた結果である。社会の高齢化が何かと問題視されているが、今こそ、医者任せにしていた死を見直すチャンスである。身近にいる高齢者の余生に寄り添い、最期をみとって死生の意味を学び取り、これからの生を充実させる糧とすべきであろう。

原田 憲一（はらだ・けんいち）

1946年生まれ。京都大学大学院博士課程修了（理学博士）。1980年山形大学理学部地球科学科・助教授、1995年教授を経て、2002年より現職。専門は地質学。著書は『地球について』（国際書院）、『地学は何ができるか』（愛智出版）など。